

設問一 次の四字熟語の空欄□に入る漢数字を後の選択肢からひとつずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1 □陽来復 | 2 議論□出 | 3 □夏三伏 |
| 4 □鳥別離 | 5 □里結言 | 6 三平□満 |

選択肢 ア 一 イ 二 ウ 四 エ 九 オ 百 カ 千

設問二 次の意味を表すことわざ・慣用句を、後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- すぐれた人材はあつかが難しいが、うまく使いこなせば大きな成果を得られるといふこと。
- 功名が上に立つ者だけに与えられ、その下で働く者の労苦が顧みられないことを嘆く言葉。
- 外見よりも実質のすぐれたもののほうが尊重されるたとえ。
- 年少者は大きな可能性を秘め、将来どんな力量を現すかわからないので、おそれ敬うべきである。
- 人はとかく、楽になると、苦しいときに助けてくれた人の恩をすっかり忘れてしまったとえ。
- 恋に身を滅ぼすたとえ。
- 何事もなまけずに努力を重ねれば、最後には成果が得られるといふたとえ。
- 物事は扱い方・やり方・言い方で田満にもなり、角も立つたとえ。

選択肢 ア 秋の鹿は笛に寄る	イ 山高きが故に貴からず	ウ 丸い卵も切りようで四角
エ 病治りて医師忘る	オ 一将功成りて万骨枯る	カ 良弓は張り難し
キ 牛の歩みも千里	ク 後生畏るべし	

設問三 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

(イ) 情報リテラシーを獲得するためには、当然のことながらそれ以前にリテラシーを保持していることが前提となる。両者の関係を考察するために、子どもの読書行動について考えてみよう。

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」（子ども読書活動推進法）ができて、国立の国際子ども図書館がつくられ、各地に子どもの読書推進のための支援センターができたりして、国を挙げて子どもの読書をめざして取り組むための取り組みが行われている。

だが、それを推進する文部科学省の生涯学習政策局青少年教育課はHPで次のように言っている（http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/suisin/index.htm）。

平成14年5月に行われた調査（社団法人全国学校図書館協議会による）によれば、児童生徒の1カ月の平均読書冊数は、小学生が7・5冊、中学生が2・5冊、高校生が1・5冊、また、1冊も読まなかった子どもたちの割合は小学生9％、中学生33％、高校生56％となっており、中学校以降極端に読書量が減少しています。

また、平成12年に行われた経済協力開発機構（OECD）生徒の学習到達度調査によれば、「趣味としての読書をしていない」と答えた生徒は、OECD平均では31・7％ですが、日本では55％となっており、「どう

しても読まなければならないときしか、本は読まない」と答えた生徒は、OECD平均では12・6%であるが、日本では22%となっています。

読書大国というキャッチフレーズから窺われる像はもろくもずれつつあることが分かる。OECD調査が対象としている生徒とは、義務教育修了段階の15歳児を指す。ここで言っているのは、小学生の読書は一定のレベルを保持しているが、中学生・高校生の段階になるとそれが急激に下がるということである。

この調査は、OECDが3年に1度数学リテラシー、読解力、科学リテラシーを72カ国(2015年調査)の子どもたちを対象にテストし比較しているもので、PISA(生徒の学習到達度調査)と呼ばれている。最近の2015年調査報告によると、日本の得点はOECD諸国の平均より高く、数学5位、読解力8位、科学2位といずれも国際的に高い位置づけにある。このうち読解力はreading literacyの訳語であり、これは本書で言っているリテラシーそのものである。2015年の調査では読解力の順位が下がったことが報じられたが、全体として15歳段階の子どもたちのリテラシーは世界的に比較してみればきわめて高いといえることができる(国立教育政策研究所2016)。

確かに、^①シロワガク前の児童から始まって小学生あたりまでの子どもたちには、絵本の読み聞かせやストーリーテリングなど多様な方法でのアプローチがあつて、各地の図書館でもサービスに力が入られている。地域には家庭文庫や児童文庫といったボランティアによって子どもたちに本を提供したり紹介したりする取り組みがある。学校に入る前後には文字を学ぶことが行われ始めて、リテラシーを獲得した子どもたちはさつそく、学校の図書館の本を借りたり、^②近隣の図書館や家庭文庫・地域文庫に行つて本を読んだりするようになる。これは読みたいから読むという行為であり、自発的なものである。さらに、自由に好きな本を読む時間を確保する「朝の読書」活動が^③フキエウし、読書を習慣づけようという試みは活発に行われている。それが、^④小学校の学年が上がり、中学・高校に進学するようになると、読む力は保持しているはずなのに、読書はしなくなるというのである。これはなぜなのだろうか。

さまざまな理由が考えられるだろう。第一には、子どもたちが忙しいと言われている。放課後はクラブ活動に参加し、学校から帰れば塾に行くこともまた当たり前になり、本を読むための時間はなかなかとれない。受験を前提とした学習行動が読書の時間を奪っていることがある。これは今に始まったことではない。もう何十年ものあいだ子どもたちは多かれ少なかれ「勉強しなさい」の掛け声とともに思春期を迎えることになった。ここには本などを読んでいる暇はないという隠れたメッセージがある。

第二に、メディアの多様化によって、本を読む以外にも情報入手する手段が格段に増えていることがある。とくにスマートフォンの手軽さが子どもたちの日常の情報行動を^⑤閉巻していることはよく知られている。

第三に、そもそも学校での学習において読書の位置づけが中学・高校に進むにつれて低下していくことが指摘できる。国語の学習においては、文学作品の一部が取り上げられてその部分だけは読むことになるが、本全体を読むように指導しているところは多くない。^⑥作品の一部を読み、そこで書かれた内容を理解し、作者の執筆意図を探ったり、描写について感想を述べたりするような国語教育が読書という行為と切り離されて行われる。まして他の科目で本を読ませるようなことは行われておらず、総合的な学習の時間で取り上げられることがあるくらいだった。この学習方法の問題は、日本の教育課題に特有のものであるので、この後、論じることとする。

子どもたちが読書きらいになる原因の一つとして「読書感想文」が挙げられる。夏休みの宿題として出されるもので、取り上げる本は課題図書の場合と自由に選んでよい場合とがある。小学校低学年の子どもたちにとって、これを書くことはなかなか困難である。なぜなら、それまで本は楽しむために読むものであるとの指導を受け、実際に楽しいから読んでいるのに、急に、読んだものから自分がいかに感想や意見を書けと言われても、そのような文章を書くことにまったく慣れていないからである。だから、内容を要約して、どこかの記述がおもしろかったとか、この部分に感動したとかの文章を付け加えるような、とおりいづべんのものばかりになる。

同様の小学生の夏休みの宿題に「自由研究」がある。昆虫採集の記録とか植物の発達の観察日記とか、どこかを訪問したときの⑥見聞録といったものが書かれることが多い。⑦「こちらはまだ救いがある。」というのは、こうしたものは、教室で理科や社会科で取り組んだ課題の延長上にあるからである。小学校の学びにおいては実験や観察、見学などはカリキュラムに組み込まれている。また、対象が具体的に設定しやすいし、また、家族の援助も受けやすい。

これに対して、読書感想文はあくまでも読書という内面的な行為から出発する思考作用を文章で表現するものである。これは発達心理学的にも言えることであるが、人が他者の文章を読んで自分なりの独自の考えを組み立てるためには、思春期を過ぎて大人に近づく過程において自らのアイデンティティを確立することが条件になる。それ以前の低学年、中学年の段階で何の指導もなしに読書感想文の課題を出すことは、子どもたちに困難さを強いることになりがちなのだ。

本に文字として書き込まれているもの自体は知識ではない。文字は読まれ、読み手が文脈のなかで意味をとろうと考えをめぐらせることで、はじめて理解できる。その理解を、再度読み返すことで確認したり自分で言葉に出して表現してみたりすることで、理解は形をもったものになってくる。しかしながらそこで理解したものは本当に著者が伝えたかったメッセージなのかどうかはわからない。というのも通常の文章には文脈や流れがあり、部分だけを理解するのでは十分ではないからだ。それでも、事実を伝える新聞記事やブログ等々の短い文章ならその理解はそこで完結するかもしれない。しかし一冊の本を読み理解することにはそれ自体多様性を伴う。全体の執筆意図と文体、書かれる際の文脈、そして章節に分かれた文章の流れが複雑な作用をもってテキストの多様な解釈を可能にする。そこで読み取ったものは他の読み手の読みと同じではないし、著者自身が表現しようとしたものとも必ずしも一致していない。あるいは、著者自身も自分が書いたものを読み返すたびに、違う読みをする可能性がある。

一つのテキストは、読み手の過去に読んだテキストの⑧蓄積や読んでいる時点での経験、読む環境等々によってそこから読み取られるものは異なるのであり、その意味で⑨正しい読み方というものはないのである。こうしたことは文学批評の世界では常に言われていることであるが、それ以外のテキストにおいても同様である。学術の世界、とくに自然科学や技術的な⑩リウイキの読みは一義的ではないかという反論があるかもしれない。しかしながら科学論文を読んでそこから何を受け取るかが読み手によって違うからこそ、読み手である科学者はそうした先行研究をもとにして次の研究に活かそうとするのである。つまりテキストの読みは読み手の過去と現在によって規定されている。これは文字テキストにかかわらない。これまで⑪コンテンツと呼んできたものすべてがそうしたものである。

書くためには、⑫本を読み、そこに含まれるコンテンツを理解し、もう一度自分なりに整理し、それが自分の思考や行動にどのように関わりをもつかを考えることが必要である。作品と自分とが⑬対峙し、自分なりの理解を何度も反復させ、読んだことをベースに新たなアイデンティティを確立する。こうした批評的な行為をもたらす心理的作用は、批判的思考（クリティカル・シンキング）と呼ばれる。これを身につければ、自分を基準にして作品との距離が測れるようになる。これは情報リテラシーを身につける第一歩になる。先ほど情報リテラシーとはコンテンツを理解するだけでなく、提供するシステムの仕組みを理解し使いこなすことを定義づけた。本というもつとも基本的なコンテンツを自分なりに理解し使いこなすことから、情報リテラシーの学習は始まる。また、読書感想文を書くことは、単なるリテラシーにとどまらず、批判的思考を前提とした情報リテラシーを身につけることで初めて可能になる。

子どもたちのなかには、Aを自分の力で発展させて、Bに展開することができる批判的思考を身につけているものもいる。かつて読書人、教養人と呼ばれた人たちの多くはそういう人たちだった。21世紀のまったく⑭べんヨウした情報社会のなかでも、それがひとりでの身につく人も少なくないだろう。だが、問題はそうした情報リテラシー能力の獲得を各自に委ねていてよいのかということである。本を読みなさいと言っただけでは子ど

もたれは進んでそうはしない。リテラシーについて文字を学び読書の楽しみを身につけたように、情報リテラシーについても体系的な学びを行うことによって、情報社会への接し方が体得できて、生活の楽しみが増すのではないかということである。

批判的思考は、ものを多面的にとらえようとするときのもっとも基本になるものである。これは単に何かを批判するとかものを批判的に見るということにとどまらない。20世紀前半のアメリカの哲学者ジョン・デューイは、批判的思考という用語を反省的思考^⑩とワギのものとして用いていた。批判が前面に出るのではなくて、^⑪ひたすら合理的思考・論理的思考を進めるときに結論を保留して、観察し考察したプロセスを振り返り点検することを優先する態度である。

これに対して、合理的思考や論理的思考を徹底的に鍛えることを批判的思考ということがある。科学的方法のなかに、常にデューイの言うような点検や反省の過程が含まれているとする立場である。たとえば統計学における検定の方法は帰無仮説を立てて実際のデータを分析し確率的にその仮説が成り立ち得ないことを論証する(帰無仮説の棄却)ことによって、対立仮説の正しさを証明する。このような批判的思考過程を取り入れた統計学は科学的方法において一般的に広く採用されている。

近年の日本の教育哲学の議論のなかでは、これらを整理して批判的思考を「批判・懐疑」「合理・論理」「反省・省察」の3つを頂点とする三角形でとらえる見方が採用されている(梶見・道田 2015, pp.3-7)。批判とか懐疑は、合理性・論理性と反省性・省察性のあいだの往復運動を意識的にどのように行いかで位置づけが決まってくるというものである。

〔根本彰『情報リテラシーのための図書館 日本の教育制度と図書館の改革』
株式会社なす書房、2017年〕

注

※1 リテラシー……読み書き能力。

※2 コンテンツ……文字、図形、色彩、音声、動作もしくは映像もしくはこれらを組み合わせたもの。

問一 二重傍線部①～④について、漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字で書きなさい。

問二 傍線部(一)「情報リテラシー」とは何か、文中から四〇字以内で抜き出ささい。

問三 傍線部(二)「小学校の学生が上がり、中学、高校に進学するようになると、読む力は保持しているはずなのに、読書はしなくなる」理由として適切ではないものをひとつ選びなさい。

- 1 読書以外にも情報入手する手段が格段に増えているから。
- 2 読書を推進するアプローチの対象は幼い子どもたちだけだから。
- 3 読書の位置づけが中学、高校に進むにつれて低下するから。
- 4 受験を前提とした学習行動が読書の時間を奪っているから。

問四 傍線部(三)「作品の一部を読み、そこで書かれた内容を理解し、作者の執筆意図を探ったり、描写について感想を述べたりするような国語教育が読書という行為と切り離されて行われる」と言える理由が分かる箇所を三十六字で抜き出ささい。

問五 傍線部（ⅳ）「こちらはまだ救いがある」理由として適切ではないものをひとつ選びなさい。

- 1 課題で扱う対象が具体的に設定しやすいから。
- 2 授業で取り組んだ課題の延長上にあるから。
- 3 実験や観察、見学は明確な結論が出るから。
- 4 課題に対する家族の援助も受けやすいから。

問六 傍線部（ⅴ）「正しい読み方というものはない」のはなぜか、その理由をできるだけ文中の語句を用いて、三十五字以内で説明しなさい。

問七 傍線部（ⅴ）「本を読み、そこに含まれるコンテンツを理解し、もう一度自分なりに整理し、それが自分の思考や行動にどのように関わりをもつかを考えること」を何と呼ぶか、最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 合理的思考
- 2 懐疑的思考
- 3 論理的思考
- 4 批判的思考

問八 空欄 A に入る語句を答えなさい。

問九 空欄 B に入る語句を答えなさい。

問十 傍線部（ⅴ）「ひとまず」を受ける箇所として最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 合理的思考・論理的思考を進める
- 2 結論を保留して
- 3 観察し考察したプロセスを振り返り
- 4 点検することを優先する

受験番号

氏名

疑問 1

1	
2	
3	
4	
5	
6	

發問 11

1
2
3
4
5
6
7
8

設問111

問一	①		②		③	
	④		⑤		⑥	
	⑦		⑧		⑨	
	⑩		⑪			
問二						
問三						
問四						
問五						
問六						
問七						
問八						
問九						
問十						